島崎洋太郎
Yotaro Shimazaki

アジア獣医皮膚科専門医協会 レジデント

経歴

2010年　酪農学園大学獣医学部卒業
2010年　中馬動物病院 勤務医
2012年　東京農工大学動物医療センター全科研修医
2015年　Vet Derm Tokyo 皮膚科獣医師
2017年　東京農工大学動物医療センター皮膚科レジデント
2020年　東京農工大学動物医療センター皮膚科シニアレジデント

Recommend
島崎洋太郎 先生が薦める、この4冊

動物看護師のための麻酔超入門・改訂版

著：佐野忠士
A4判　並製　168頁

定価：7,700円（税込）のところ
キャンペーン価格6,930円（税込）

カラーアトラスBOOKS 犬と猫の皮膚病【和英併記】

総監修・編著：大草　潔
編著：伊從慶太、大森啓太郎、柴田久美子、村山信雄
英訳：篠田仁美
A4判変形　上製　340頁

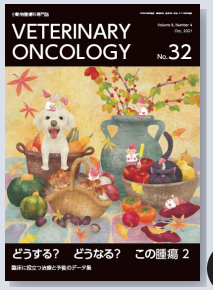
定価：31,900円（税込）のところ
キャンペーン価格28,710円（税込）

28号
（2021年8月号）
島崎先生ご執筆号

VETERINARY BOARD

耳炎 ～良好なコントロールのための
ポイントと難治症例への対応～
臨床の選択肢を広げるケーススタディ・マガジン
月刊誌　A4判　96頁

定価：4,400円（税込）のところ
キャンペーン価格3,960円（税込）



32号
（2021年10月号）

VETERINARY ONCOLOGY

小動物腫瘍科専門誌
どうする？どうなる？この腫瘍2
臨床に役立つ治療と予後のデータ集
小動物腫瘍科専門誌
季刊誌　A4判　132頁

定価：7,150円（税込）のところ
キャンペーン価格6,435円（税込）

Information

○島崎先生のホインタビューは、Eduward Mediaサイトからもお読みいただけます。
　詳しくはhttps://media.eduone.jp/にてご確認ください。
○先生からお勧めいただいた書籍が、期間限定にてお安くお買い求めいただける
　キャンペーンを実施中（キャンペーンお申込期限:2022年1月末日まで）。
　詳しくはhttps://eduward.online もしくは専用チラシをご確認ください。

EDUWARD Press
〒194-0022 東京都町田市森野1-27-14サカヤビル2階
tel. 0120-80-1906 fax. 0120-80-1872 https://eduward.online
DM：70001819

獣医療のミライ 4
インタビューシリーズ

島崎洋太郎 アジア獣医皮膚科専門医協会 レジデント

どこまで広く深く潜れるか―
知識と技術の深さが専門医の本領

どこまで広く深く潜れるか―
知識と技術の深さが専門医の本領

―島崎先生が獣医師になりたいと考えはじめたのは、いつ頃だったのでしょうか?

「何らかの専門職に就きたい」と考え始めたのが、中学生の頃だったと思います。うちの親族はサラリーマンが多いのですが、毎朝、電車に乗って会社に行って、夕方に帰ってきて…という勤め人の生活を将来の自分の姿として考えるには違和感があって。その後、高校1年生のときに理系を選択し進路として考えていた農学部の中で、最も興味をもてたのが獣医学科でした。「犬や猫が好き」というよりも「手に職をつけたい」という気持ちが強かったように思います。

農学部を選んだ理由が、子供の頃から自然や動物との暮らしへの憧れが強かったからだと思います。子供の頃はよく、栃木県のかなり田舎にある母の実家に遊びに行っていましたが、母の実家では犬や猫をいつも飼っていました。交通事故で脚を1本失ってしまっていた犬もいましたが、その子を散歩に連れて行くと3本足で器用に走り、当時小学2～3年生だった幼い僕を気遣って歩調を合わせてくれたり、振り返って目で合図をしてくれる。「犬って優しい、頭のいい生き物なんだ」と、すごく感動した記憶があります。そうした動物に対するよいイメージが、母校の酪農学園大学を選んだ背景にあったのかもしれません。

臨床での「なぜ」を追求 深い知識求め、研修医の道へ

―大学卒業後は一次診療医として 2 年間携わっておられたとか。

はい。東京都大田区にある中馬動物病院という比較的大きな一次診療の病院で、院長先生をはじめ先輩の先生には本当によくしてもらいました。私は大学の専攻が公衆衛生だったので、動物をほとんど触った経験がない状態からのスタート。犬・猫ではなく菌と向き合う大学生活でしたから（笑）、就職したばかりの頃は本当に何もできなかったです。

大学6年生の4月ごろ、臨床に進みたいと思うようになったきっかけがありました。ある日の実習で、整形外科の泉澤康晴先生の実習補助を担当することになったんです。僕と同じく臨床系の実習補助を5年間避け続け、「不真面目」と言われていた友人と2人で腹を括ったのですが、これがもう怖くて仕方なかった（笑）。研修医の先生はオペ中ずっと怒られているし、それまでの大学生活で味わったことのない緊迫感がそこにはありました。我々2人は器具をもって立っていただけですが、ずっと手が震えていて、オペが終わったときには汗びっしょり。でも、そんな怖すぎる現場で踏ん張って症例に向き合う先輩の姿を間近でみて、臨床は「緊張感があるやりがいのある仕事」と憧れました。

―卒業後の進路を臨床に変更され、人生が一気に変わりましたね。

ええ、本当に（笑）。大学6年生の春までは公務員志望だったのに。就職先の中馬動物病院でも最初は戸惑ったものの、先輩方の手厚い指導と、しっかりとした診療マニュアルがつくられてあったので、それを覚えることである程度の動きはできるようにはなりました。そこから一つレベルを上げて、「なぜ、こう対処するのか」、「なぜ、この薬を使うのか」と考えはじめたとき、当時から日々の診療でよく会う皮膚科に焦点を当て、東京農工大学の研修医募集に申し込むことに決めたんです。ですが、やる気は満々だったのですが、募集の締め切りとタイミングが上手く合わなかったんですよ。

正直なところ、「公務員志望に切り替えたほうがよいのかな」と、かなり悩んだ時期はありました。でも、新卒の獣医師は大体2～4年目くらいで一度は「辞めようかな」と悩んでしまう瞬間があるものだと思います。私も皆と同じように悩んだわけですが、「やっぱり農工大の皮膚科で勉強したい」という気持ちが強かったので、次に農工大の研修医募集がかかるまで仕事もせず、腰を据えてじっくり学び直すことに決めました。バイトもせず、暇な時間がたっぷりあったので、教科書や雑誌

をイチから全部じっくり読み直すこともできました。それらを読み切ったあたり、大学卒業から3年目の冬に研修医の募集がかかったので応募したところ合格し、翌春から農工大で研修医として勤めはじめました。

皮膚科の専門診療との出会い 診断ありきのスタイルに刺激

―農工大での研修医時代とその後を振り返って、いかがでしょう。皮膚科専門医の道に進まれたエピソードもぜひお聞かせください。

農工大の研修医は当時、さまざまな診療科で2カ月ずつ研修し、2年目のラスト半年間は好きな診療科を選べるようになっていました。私の場合は、経験・知識ともに豊富な、当時はレジデント3年目だった伊從慶太先生がなんでも丁寧に教えてくださったお陰で、ちょっと皮膚科のイロハが分かる気分にさせてもらいました（笑）。その後、伊從先生からVet Derm Tokyo（VDT）にお誘いいただき、VDTでは伊從先生のサポートにつきながら皮膚科専門診療がどういうものなのかを学びました。

皮膚科診療というのは、どの病院でも対症療法が基本になっている場合が多いと思います。でも、農工大皮膚科は必ず診断をつけてから治療を進めるスタイルです。それを初めてみて「これは面白いぞ」と感じたのが、皮膚科への熱がさらに上がった瞬間だったと思います。同年代の仲間も多く、さまざまな先生にサポートしてもらうなかで皮膚科の道を歩みはじめた感覚です。

未来の皮膚科を創る一人に 専門医として独り立ちを

―島崎先生は今、アジア獣医皮膚科専門医協会のレジデントでいらっしゃいます。なぜ、アジア獣医皮膚科専門医を選ばれたのでしょう。開業という選択肢もあったでしょうし、色々と悩まれたと思いますが。

進路に悩んでいたとき、同期の先生から「開業はいつでもできる。皮膚科の専門診療にチャレンジできるのは今しかないよ」といわれたのが、かなり心に響きました。早く開業したいという想いもどこかであったのですが、「今、専門診療にとことんチャレンジしてみないと後悔するだろうな」という想いのほうが強くなったように思います。

VDTでは伊從先生のサポートを務めるなかで獣医皮膚科専門医の仕事に触れ、セミナーや執筆の機会も徐々にいただけるようになっていきました。ただ、「いつまでもサポート役を続けるわけにはいかない。研究者としても、金銭面でも自立しなければ」と考えはじめました。さらに、すでに多くの先生が取得されている皮膚科認定医だけでは生涯の自立は難しいと思い、アジア獣医皮膚科専門医の取得を目指し、レジデントの道へと進むことを決めました。

―皮膚科専門診療への想いをどんどん強くされていったわけですね。

2017年にフランス・ボルドーで開催された世界獣医皮膚科学会に参加できた経験も大きかったと思います。世界大会で、伊從先生をはじめとする日本の先生が発表されているのを目の当たりにし、有名な論文を書いた先生が目の前にいるのをみた衝撃が強かったんですよね。「この世界はすごく面白そうだな」って感じました。

フランス大会では、皮膚科診療は今後どのようになっていくべきなのかというディスカッションもあり、その中で、「自分も未来の皮膚科を創り上げていく一人になれたらいいな」という想いが芽生えました。あの美しいボルドーの街で、大隅尊史先生と夜中の1時頃、街角でビールを飲みながらこれからのことを語りあったのですが、大隅先生に「一緒に獣医皮膚科専門医になろう」といっていただけたのも、大きな後押しになったのかな、と思います。

診療のモヤモヤ感を専門医が解決 よくみる疾患でも診療に技量差

―専門医というのはもともと海外のシステムですよね。島崎先生は、専門医と一般診療の差は、どこにあるとお考えでしょうか。

僕が大学を卒業して1年目の臨床で感じていた「本当にこの方法であっているのか」というモヤモヤ感、あれが象徴的だと思います。おそらく開業医の先生も、皮膚科診療に対してモヤモヤ感をもったままの方は多いのではないでしょうか。皮膚科の病態をはっきり説明できるようになるまでにはかなりの勉強量が必要で、多忙を極める開業医は勉強に割く時間が限られます。そのモヤモヤ感をダイレクトに説明してあげられる存在が専門医だと僕は思っています。

知識の部分で、抜けがない広さと深いところまで潜れている存在が、専門医だと思っています。あとは技術ですね。皮膚を形態的にみるのということに関しても、かなりトレーニングされた技術が専門医には必要です。

専門医に合格し後進を育てたい 世界に羽ばたける人材の育成を

―島崎先生はどのようにして皮膚科専門医としての勉強をされてきたのでしょうか。特に参考になった勉強法や文献などがあればぜひ、お教えください。

大学卒業後3年目、研修医になる前の時期に「スモールアニマル ダーマトロジー」や「スモール アニマル サージェリー」をじっくり読んだのですが、ただ流して読むだけでなく、僕の場合は知識を全部頭に突っ込む方法で読み込みました。すごく時間がかかりますが、それをやったお陰で溜まっていたモヤモヤ感が解消し、かなりすっきりした感覚がありました。それと、雑誌も沢山読みました。特に症例のケーススタディについては、頭の中に残っている臨床のケースと照らし合わせ、自分がこの症例に出会ったらどうするか、そして著者が何を考えながら書いたのかを想像しながら読むと、学べるものが非常に大きいと思います。教科書など体系的に整理された書籍なんかを読むのはインプットですが、症例を読むのはアウトプットに近いと感じていました。

―最後に島崎先生が、専門医としてどういうことを目標にされているのか。後進の若い先生へのメッセージを含め、ぜひお教えください。

後進の先生には、私が培った知識や技術をベースに知識や経験を積み重ね、レベルアップしていってほしいです。私が専門医となった暁には、広い世界に生き生きと羽ばたける人材がどんどん生まれるような環境づくりに貢献したいと思っています。

自分自身については、ようやく勉強できる時間が取れるようになってきたところで、来年のアジア獣医皮膚科専門医の合格を目指しているところです。同試験で重視されるエキゾチックアニマルに関する皮膚科の勉強も進め、将来的には犬・猫だけでなく、幅広い種類の動物にアプローチできる皮膚科医になりたいと考えております。